

紀行文学として見た『土佐日記』

中 里 重 吉

は じ め に

さきに、『おくのほそ道』をとりあげて、紀行文学の性格を考察したのであるが、その初めに多少言及した『土佐日記』を、紀行文学としてこのたびは考察してみることにした。

その際引用した、「抑、道の日記といふものは、紀氏、長明、阿佛の尼の、文をふるひ情を盡してより、餘は皆佛似かよひて、其糟粕を改る事あたはず」とある、芭蕉の『笈の小文』の一節では、「紀氏」の『土佐日記』がその筆頭にあげられている。

この『笈の小文』のことばから、当然芭蕉が紀貫之の『土佐日記』を見ていたことは、疑う余地のないところであるが、芭蕉が『おくのほそ道』で加えた例の虚構の問題を、この『土佐日記』にもある同じ虚構の上にさぐって、両者の共通的事象を対照関連づけようと試みたものも見られる⁽¹⁾。

しかし、本来紀行文学は、日記文学もまた然り、態裁、叙述形式などの外的な面においては先蹤にならうということはあっても、内容や構想の内的な面については、同じ名勝古跡などの取材によるならばともかく、互に影響し、関連し合うということはいえぬわけである。すなわち紀行文学は、個々に断続した作品群となって、系譜の上に緊密におさまるべき性格のものではないからである。

したがって、文学史全体の流れの中においてはそれぞれ定着した位置づけができるとしても、紀行文学史としてはおのずから異った様相を呈することになって、むしろ、個々の紀行文学作品を考察して、その性格のあらわれを対比することによって、いくつかの類型に整理してみることが先行すべきではなかろうかと現在は考えているところである。

1. 『土佐日記』の概観

まず、作品としての『土佐日記』そのものを考察していく。

『土佐日記』は、古く『土左日記』と記され、ひろく一般に『とさの日記』と呼ばれていたという⁽²⁾。

題名に日記とあるように、記載の形式は着実に日次を追って、その表現や語句にも一般に追憶めいたものが少なく、日毎の書きつぎをなしている⁽³⁾。

従前の日記は、宮廷の行事を中心とした、備忘録的記録が主であって、半ば公的なもので、したがって、男性の手になる、漢文で記載されたものであった。当時の男子貴族の教養が専ら漢詩文的知識にもとづくものであったからである⁽⁴⁾。

本来、日記そのものは、中国から伝わった官庁記録の様式であって、「その日の事書」として、後日の参考に資する目的をもった実用文書であった⁽⁵⁾。

ところが、この『土佐日記』は冒頭「をとこもすなる日記といふものを、をむなもしてみむとて、するなり」とあることから、女性の日記の態裁をとった、仮名書きの和文で綴られている。

仮名文字の歴史が当時まだ浅く、女性の私的な用に供せられていた仮名をあえて用いたということに、古来注目されてきた特異性があるわけである。

このことは、仮名書きにするために、女性の日記の形態をとったとか、また、和文によって、私的な内容を自由に表現することができるという意図によったとか、『土佐日記』のはらんでいる問題となっている。

紀行文学として見た『土佐日記』

次に『土佐日記』の内容についてみる。まずここでは、紀行文学としての、土佐日記の内容のみを考察しよう。

すなわち、『土佐日記』は、紀貫之が国守の任を果たして、土佐の国から京に帰るまでの出来事や感想などを、日次を逐うて記した、路次の記なのである。

さらに、その路次をたどれば、

承平4年(934)12月21日、任満ちて帰京の途につく。土佐の国府より大津に移る。

同27日大津出発、海路室戸岬を迂回、阿波の鳴門と紀淡海峡を横断、大阪湾を浦づたいに、淀川の川口まで北上、さらに淀川を溯江。

翌5年2月11日、山崎の津に到着。同16日入洛帰宅。

このように、『土佐日記』が、土佐の国守であった貫之の一行の帰京の旅で日日生起した体験的事実を記したものであることから、紀行文学と目されてきた。唐の李翺の『来南録』を『土佐日記』の先行文学と考え、『土佐日記』を後世の『更科日記』や『東関紀行』など日本の紀行文学の系列の先頭に立つと見る考えが生まれてくる所以であって、前述の芭蕉の言もまたこれにならうものである。

さて、ここで『土佐日記』の記事内容を日毎に要約して、その文章の長短を字数をもって示したものを添え、表にまとめてみた⁽⁶⁾。ただし、記事にふれて詠みこまれた和歌や歌論的な言辞、また時に応じ、所による風懐まではふれていない。

『土佐日記』記事内容要約表

月・日	記 事	字数	月・日	記 事	字数
発端	出発、国府より大津へ。	77	25	新国守の館に招かる。	52
12・21	送別。	123	26	もてなしをうけ、辞す。	273
22	願立、餞別、酒宴。	77	27	大津より浦戸へ。亡児を悼む。人々追ひ来たる。	643
23	餞別(やぎのやすのり)。	135			
24	餞別・酒宴。	65	28	浦戸より大湊へ。さし入	

紀行文学として見た『土佐日記』

	れものあり。	70	25	船出さず。海賊来るとか。	43
29	大湊泊り。医師の来訪。	48	26	海賊をさけ、船出。手向	
1・1	同じ泊り。元旦を祝ふ。			けす。追風をうく。	328
	懐京。	172	27	風波荒く、船出さず。	179
2	なお、大湊泊り。	25	28	朝までも、雨降る。	16
3	同所。	38	29	船出。好天。京の子の日	
4	風吹く。さし入れを受く。	85		をおもふ。土佐の泊りに	
5	風波やまず。人人訪ふ。	34		寄す。	369
6	きのふのごとし。	9	30	夜半、阿波の水門を渡り	
7	白馬の節会を懐ふ。若菜			和泉の灘に着。	243
	の祝ひ。御馳走を受ける	792	2・1	出発。風波なし。黒崎の	
8	海上の月。業平の月の歌			松原を経、箱の浦より編	
	に寄せて一首。	164		手。	389
9	大湊より奈半の泊りへ。		2	雨風やまず。神仏に祈る。	27
	国境での人々との離別。		3	きのふのやう。風やまず。	93
	宇多の松原を過ぐ。夜着。	813	4	荒天と誤って、船出さず。	
10	奈半泊り。	18		浜の貝を見、死児を憶ふ。	349
11	奈半より室津へ。暁発。		5	和泉の灘より小津の泊へ。	
	羽根にて懐京。亡児の憶。	444		京へ近づき喜び。石津の	
12	室津着。	38		松原住吉へ。死児を憶ふ。	
13	暁雨。後、女ども水浴。	215		風吹き、明神に幣奉り、	
14	雨。同泊。節忌。鯛米酒			さらに鏡を投ず。	1007
	もてきたる。	131	6	難波に着き、川尻に入る。	
15	同所。小豆粥煮ず。	131		都近くなる喜び。	222
16	同所。風波やまず。	156	7	川を漕ぎのぼる。川の	
17	出発。天候悪化して再び			干て、なやみわずらふ。	320
	戻る。	296	8	鳥飼の御牧の辺に泊る。	
18	海荒く、船出ず。船中無			鮮魚のさし入れ。	133
	聊。歌を作る。	414	9	渚の院を見、業平を憶	
19	日悪し。船出さず。	15		ふ。死児追慕。鶴殿泊。	
20	昨日のやうなり。月を見		10	さはりありて、のぼらず。	14
	て、仲麿をおもふ。	595	11	八幡宮、山崎の橋を見、	
21	陽出づ。船出。黒鳥を見			相応寺の辺に泊る。	215
	る。海賊を怖る。	422	12	山崎に泊る。	12
22	他の泊りに問ふ。山見ゆ。		13	なほ山崎に。	10
	海荒れる。	219	14	車、京へとりやる。	19
23	海賊の難に、神仏を祈る。	39	15	船よりひとのいへに移り、	
24	昨日と同じところ。	15		もてなしをうく。	115

16	京へのぼる。山崎の看板 を見る。嶋坂に寄る。月	下桂川を渡る。家に到る。 家荒る。なほ死児を憶ふ。	894
----	----------------------------	------------------------------	-----

(字数は月日の文字も算入)

2. 『土佐日記』の虚構の問題

このように通覧すれば、紀行文学であって然るべき『土佐日記』であり、また古来そう称されてきたところを、近来、その内容の研究がすすみ、読みが深まるとともに、いろいろな問題点が指摘、強調されるにいたった。

そこでそれらの問題点を概観しておくことにしたい。

a 女性仮託について

まず、「をとこもすなる日記といふものを、をむなもしてみむとて、するなり。」という発端のことばによる、女性仮託の問題から始めよう。

この問題にふれるにあたって、作者紀貫之が女性に仮託して書いたものという確証が、古来ないということである。

したがって、女性仮託からむしろ女性そのものの作と見て、その女性を貫之の妻ではあるまいかという説⁽⁷⁾が出されたこともある。

しかし、これは内容、構成、表現等の面から見て、やはり、女性的要素より男性的要素が多分に勝っているということから、男性作すなわち貫之作とするのが妥当である。

しからは、なぜに女性仮託ということをあえてしたかということである。前述のように、それによって、仮名書きにしたということ、仮名書きにした和文によって、漢文と異った、私的な自由な表現と内容をもりこむことができるという意図が考えられる。

とくに、任国土佐の地で喪った幼い女兒を追慕愁嘆する情景が点綴されて、この『土佐日記』の一抹の哀愁をそえていることは、公的な漢文のよくするところではなく、やはり和文の味わいと、作者の女性仮託によって、情を述べつく

しているのである⁽⁸⁾。

要するに、作者を女性なりと仮託する宣言をあえてしたことは、ただに、この作品が女性常用の仮名書き和文をもって叙述されていることに対する読者の了解を求めるためばかりでなく、作者自身を作品の世界に解放して、自由に自己を語らしめているのである。

ちなみに、筆者貫之はこの『土佐日記』に和文の筆をふるったばかりでなく、すでに『古今集』の仮名序、また『大井川行幸和歌序』など、仮名文としても名文を残して、文章家としての力量を示している。

㍷ 和歌について

筆者自身女性に仮託して、自由に自己を語らしめる態度をとったことから、内容の面にも多くの虚構を加えている。

内容の虚構性の問題としては、日記の中に点在して、内容の大きな部分を占めている和歌のほとんどすべてが、有名な古歌などの特別なものを除いて、貫之自身の詠作であることが推知できる。

『土佐日記』の成立時期に近い頃の撰集『後撰集』『古今六帖』などが、『土佐日記』中の和歌を、ことごとく貫之の名において入集している事実がある。

また、その和歌の中には、『土佐日記』以外の貫之の和歌と共通した発想表現をもついわゆる類歌が非常に多い。

このことは、貫之自身の歌であるものを、老幼男女種々の性格の人物の作品として『土佐日記』の中に収めているので、したがって作中人物自体必ずしも実在の人物に宛てたものではなく、虚構設定された貫之自身の分身であると見なされるわけである⁽⁹⁾。

なお、その和歌を子細に見ると、所収56首のうち、水準以上に達していると目されるものは、「あるものと」「棹させど」（12月27日）「ゆく人も」（1月7日）「影見れば」（1月17日）「よする波」「忘れ貝」（2月4日）「いつしかと」（2月6日）「千代経たる」「君恋ひて」（2月9日）「さざれ波」（2月11日）「生

まれしも」「見し人の」(2月16日)の12首ぐらいで、中間的な作品として凡作の域を脱せぬもの21首、残る23首にいたっては、平凡、稚拙、愚劣な作品で、当時歌壇の第一人者であった貫之の作品とは信じ難いものがある。

しかも、幼童、少女の和歌というのが6首あって、このうちの2首は『古今六帖』に貫之作として入集されていて、これらのほとんどが貫之自身の作と類推されている⁽¹⁰⁾。

このことは、『土佐日記』が年少初心者向きの和歌入門書と見なされ、これらの巧拙さまざまの歌が作歌指導に役立たしめられているとされる。そして後述する『土佐日記』の歌論書的性格の立論を導くのである。

c 地名について

人物の虚構にとどまらず、紀行文学としては重要な意義をもつ地名にまでも及んでいる。

例えば、1月30日における淡路の「たながは」は和泉の多奈川(谷川)の誤りであり、和泉の「なだ」が淡路の灘の誤りであること。

そして、この誤りが2月1日、5日にまで及んでいるのである。こちらの「なだ」については、「灘」という広域地名とする説明も行なわれたが、和泉の国の海岸線、すなわち大阪湾の西南隅から東側中央の海岸線には、いわゆる「灘」と称せられる地勢が見られない。

しかも、記述の上では、2月1日のうちに貫之一行は、たながは(谷川)を出発して、黒崎、箱の浦を過ぎ、佐野、貝塚のあたりまで達しているわけで、2月5日の出発点をまた「和泉の灘」と記していることは、名と実との二重の錯誤をおかしていることになる⁽¹¹⁾。

また、1月21日に室戸岬を回航してから、29日に土佐泊りに着くまで21, 22, 26の3日の記事には、寄港地についての地名がない。

d 表現技巧について

今度は、表現技巧に目を転ずると、単なる和文でなく、和文の上に漢詩文の

技巧を加えて、独自の文体を成している。

貫之自身当時の宮廷人として、漢学の教養を深く身につけていたことはもちろんで、それが、女性仮託の『土佐日記』に、男性貫之の作者の本性を自ら露呈することにもなるわけで、事実『土佐日記』で女性仮託の約束が守られているのは、当初の6日間に過ぎない。

文章の上に目立つ特徴としては、対句坤韻が用いられて、その対句法は脚韻における対偶、隔句対、起承転結等の平仄をふむだけでなく、同類品詞の対蹠的な配置省略、さらに前日と後日とに章段を分かっての遠隔対を試みるなど多彩である⁽¹²⁾。

その例の一端を示してみる。

彼れ此れ、知る知らぬ（12月21日）

前の守、今のも、もろともに下りて

今の主も、前のも、手とりかはして

酔ひ言に快げなる言して、出で入りにけり。（12月26日）

海の辺にとまれる人も、遠くなりぬ。

船の人も 見えずなりぬ。

岸にも 云ふことあるべし。

船にも 思ふことあれどかひなし。（1月9日）

日一日風やまず。……………（1月27日）

夜もすがら雨やまず。……………（同 28日）

ところの名は黒く

松の色は 青く

磯の波は 雪の如くに

貝の色は 蘇枋に

五色に今一色ぞ足らぬ（2月1日）

船酔ひの 淡路の島の大御（2月6日）

船君の 病者 (同 7日)

山崎の 小櫃の 絵も

曲りの 大鈎の 像も (2月16日)

また、平素たしなむ漢文訓読調が、単語や文の中に混在して来ることも当然で、和文である『土佐日記』の文体に、それによって独得の表現効果をあげている⁽¹³⁾。

まず訓読語とみられる主なものをあげることにする。後に対比したのはそれに相当する一般和語である。

ひそかに(1月7日, 2月1日, 同8日, 同16日) = みそかに, しのびて, しのびに, しのびやかに

たがひに(1月9日) = かたみに

すみやかに(1月26日) = とく, はやう

はなはだ(2月4日) = いと, いたく, いみじく

……に似たり, ……に似たる(12月29日, 1月30日) = やうなり, やうなる

しかれども(2月4日) = されど, さはいへど, さりともし

……のごとし(1月6日) = のやうなり

なくして(1月16日) = なくなりて, なくて

みえずして(1月9日) = みえずなりて, みえで

それのとし(12月21日) = そのとし, さいつとし

これを文章の上では次のような例が見られる。

楫取, 「今日, 風雲の気色甚だ悪し」といひて, 船出ださずなりぬ。しかれども, ひねもずに波風立たず。(2月4日)

ある人の子のわらはなる秘かにいふ。「まる, この歌の返しせむ」といふ。(1月7日)

今日, 海に波に似たるものなし。神仏の恵み蒙れるに似たり。(1月30日)

なほ悲しきに耐えずして, ひそかに心知れる人といへりける歌(2月16日)

以上、単語と文の上に、漢文的表現の一端を見たのであるが、それぞれある時は、荘重的な文調を示し、またある時は逆に詼諧的なユーモアの効果を出して、貫之自身、女性仮託の枠を脱してまで、特別の技巧を加えて、工夫をこらしているところがうかがえる。

e 作者の意図について

このように『土佐日記』のもつ問題点をさぐってくると、『土佐日記』の作者の意図は何であろうかということに帰着してくる。

そこから、『土佐日記』は、貫之の歌論書であり、作歌入門書であるという意見が登場してくるのである。

その歌論書の性格として、次のような特徴的例証があげられる。

- (1) 句題和歌の詠法を紹介したもの（12月27日、1月16日、17日、27日）
- (2) 漢詩、和歌の朗吟に音楽的効用を見出したもの（12月26日、27日、1月20日、27日）
- (3) 踏歌、甲斐歌、民謡等の歌唱に言及したもの（12月27日、28日、1月8日、21日）
- (4) 贈答歌の作例について、その善悪を示したもの（12月26日、27日、1月7日）
- (5) 問答歌の紹介（1月18日）
- (6) 屏風歌の作例（1月9日）
- (7) 詠史述懐歌の作例（2月9日）
- (8) 和歌の即境性を指摘したもの（1月8日、29日）
- (9) 素材の着眼に注意したもの、殊に色彩感に関して（1月21日、2月1日）
- (10) 歌枕の觀念に言及したもの（2月5日）
- (11) 平言歌を斥けたもの（2月1日）
- (12) 用語表現の適否、殊に譬喩的表現に関して（1月7日、18日、22日）

- (13) 感動, 発想, 表現の可否について (1月9日, 2月6日, 7日)
- (14) 定型短歌論 (1月18日, 2月5日)
- (15) 和歌沿革論 (1月20日)
- (16) 和歌効用論 (1月20日)
- (17) 文学的感動の超民族, 超国家的普遍性を論じたもの (1月20日)
- (18) 詩歌発想論とその超民族, 超国家性を説いたもの (2月9日)
- (19) 名歌に関する臨地即境的な歌語り (1月8日, 20日, 2月9日)
- (20) 幼少者の和歌の頻繁な紹介 (1月7日, 11日, 15日, 22日, 26日, 2月5日)

このように, 和歌に関する発想, 用語, 表現, 即境性, 歌型, 効用, 沿革等の万般にわたっての多種多様の発言がなされている⁽¹⁴⁾。

とくに(20)の幼少者の和歌を載せていることは, 年少読者の親近感をさそって, この書を啓蒙的な作歌手引きにも役立たしめている⁽¹⁵⁾と見られることは既述したところである。

3. 貫之の人と業績

ここで, 作品『土佐日記』から離れて, 作者紀貫之その人について考察をまとめておきたい。

貫之の生年については, 確かな資料を欠いているところから, いろいろな説が行なわれている。

その主なものを整理すると, 次の3つになる。

- (1) 貞観初年 (859年頃)
- (2) 貞観14年~16年 (872~874)
- (3) 元慶7年~8年 (883~884)

このうち, (3)の元慶年間説は, 中世より行なわれているところであるが, 貫之の活動した成年時の年代とズレを生じ, 問題とされなくなっている。

(1)の貞観初年生れとするのは、香川景樹の『土佐日記創見』の説であって、「まつ、延喜六年、古今集撰進の時をしばらく四十五六歳と定む。」と推定したところによるのであるが、これによると没年が84～5歳の高齢に達することになる。

これらの2説に対して、(3)は合理的な推論として、『土佐日記』の記事の一節から当時70歳以前と考え、これは貫之生涯の諸事実とも適合して、富士谷御杖の『土佐日記燈』に引く「野道生が附注に、延喜五年古今集をえらばれしは三十四歳、天慶九年七十九歳にて卒去せられたるよししるされたり。」にも相応するという⁽¹⁶⁾。

ところが、この「野道生か附注」の年齢計算に錯誤があるのを正し、伴信友の『仮字本末』の貞観10年説に同じ、貫之の生年を貞観10年前後と推定されている⁽¹⁷⁾のに従っておく。

これによれば、没年は天慶8年(945)78歳となる。

さて貫之の名が、史上最初に見出されるのは、寛平5年(893)9月以前の『是貞親王家歌合』『寛平御時后宮歌合』及び同年9月25日成立の『新撰万葉集』とにおいてである。現在知られている範囲で、貫之の歌は『親王歌合』に2首、『后宮歌合』に7首、『新撰万葉集』に4首である。当時20代の若輩貫之は歌人としても、まだ世に認められる域に達していなかったのである。

官歴で最初に文献に見えるのは、延喜6年(906)2月の越前権少掾であるが、それより以前に彼は御書所預を勤めていた。この御書所は、禁中の書籍を掌るところで、預、書手等の役があった。預というのはその主任に当たるもので、いわば貫之は図書館長のようなものに任命されたのである。

したがって、前記寛平年間の貫之は、極めて微官の間にとどまっていたわけである。

貫之の代表的大事業である勅撰和歌集の劈頭をかざる『古今集』の編纂の緒についたのが、延喜初年といわれ、まず部類不完全な『続万葉集』という形で

まとまったのが延喜3、4年頃で、更に改編の勅命をうけて部類を整備し、延喜5年(905)4月15日に第一次上奏本が完成したと考えられている。

つづいて、第二次上奏本精撰の事業には貫之が専従し、完成は延喜8年乃至9年(908~9)の頃といわれている。

『古今集』の「仮名序」「真名序」をここでは貫之の作とみても、これらを含めて『古今集』編纂の事情について諸説紛々としてまだ帰一するところがないのが現状である⁽¹⁸⁾。

かくして、貫之はこの『古今集』の編纂の事業を通じ、当代の歌壇に占める地位を着々と築きあげていったのである。

官位も越前権少掾より、内膳典膳(延喜7年2月)、少内記(延喜10年2月)、大内記(延喜13年4月)、従五位下(延喜17年1月)、加賀介(延喜17年1月)、美濃介(延喜18年2月)、大監物(延長元年6月)、石京亮(延長7年9月)、土佐守(延長8年1月)、玄蕃頭(天慶3年3月)、朱雀院別当(天慶3年5月)、従五位上(天慶6年1月)、木工権頭(天慶8年3月)と昇進している。

しかし、この間従五位下より従五位上にいたるまで、延喜17年(917)より天慶6年(943)まで実に26年を費している。

また、土佐国より帰京後、天慶元年(938)貫之は藤原忠平、実頼、師輔にしきりに官職なきを訴うとも伝えられている⁽¹⁹⁾。

このように、貫之の栄進は必ずしも順調なものとはいえないが、藤原氏一門によって頭官高位を占められた時代においてはまずやむをえないところであったろう。

吏僚としての貫之は、精励格勤、廉直の司として、真人、今守、夏井、田上、深江等の紀氏の祖先の先蹤にならって、大過なくおのが職分を果たしたものとされる。

これに対し、歌人貫之は、『古今集』撰進の大事業にたずさわったのみならず、次のような目ざましい業績をのこして、当代歌人の第一人者たる地位に達

することができた。

『新撰和歌』——『古今集』と同じく醍醐天皇の勅を個人的にうけて、『古今集』のなかから抜き、寛平から延長にいたる当代の秀歌を集めてある。勅をうけてから、土佐守として赴任し、任地土佐において撰修した。承平5年(935)任満ちて帰京したとき、すでに醍醐天皇は崩御、その勅を伝えた中納言兼輔もこの世になく、草稿のまま蔵せられるにいたった。現存するものは、巻一に春秋の歌120首、巻二に夏冬の歌40首、巻三に賀哀20首、別旅20首、巻四に恋と雑160首、計360首を収めている⁽²⁰⁾。

『貫之集』——貫之の家集で、自撰本と流布本とがある。

自撰本は、貫之生前少なくとも二度家集を自撰して、一度は『古今集』編纂の資料として、他は晩年において行なわれているという。伝行成筆貫之集の断簡をその自撰本と推定している⁽²¹⁾。

流布本は、現在伝わっている歌仙家集本系統のもので、貫之の死後相当へだたった時代に何人かの手によって編纂されたものと思われる。貫之の手によって成ったものでないが、詠作した和歌約860首を収め、最も多く貫之の作歌を伝えている⁽²²⁾。

歌合として、

寛平后宮歌合・是貞親王歌合(寛平5年以前)、亭子院女郎花合(昌泰元年)、平定文家歌合(延喜5年2月)、亭子院歌合(延喜13年3月)、内裏菊合(延喜13年10月)、左大臣忠平前裁合負態の時洲浜作歌(延長5年9月)、大納言恒佐扇合(承平5年)周防国紀貫之家歌合(天慶2年2月)

屏風歌として、

本康親王七十賀屏風歌(延喜元年以前)、中宮屏風歌(延喜2年5月)定国四十賀屏風歌(延喜5年2月)、内裏月次屏風八帖の料の歌45首(延喜6年)、尚侍満子四十賀屏風歌(延喜13年10月)、女一宮宮勸子内親王屏風歌(延喜14年2月)、齋院屏風歌(延喜15年閏2月)、右大将道明屏風歌(延喜15年9月)、

廉子女王五十賀屏風歌(延喜15年12月), 齋院屏風歌(延喜16年), 敦慶親王屏風歌(延喜17年冬), 女四宮勤子内親王御髮上屏風歌(延喜18年2月), 東宮屏風歌(延喜18年4月), 承香殿女御屏風歌(延喜18年), 東宮御息所屏風歌(延喜19年春), 中宮穩子屏風歌(延長2年5月), 左大臣忠平北方四十賀屏風歌(延長2年), 民部卿清貫六十賀屏風歌(延長4年9月), 法皇六十賀屏風歌(延長4年9月), 中宮穩子屏風歌代作(延長6年), 元良親王四十賀屏風歌(延長7年10月), 北宮裳着屏風歌(承平3年8月), 清和七親王御息所六十賀屏風歌(承平5年9月), 内裏屏風歌(承平5年12月), 忠平貴子父子邸障子歌・実頼屏風歌(承平6年春), 侍従師尹屏風歌(承平6年), 内裏屏風歌(承平7年1月), 右大臣恒佐屏風歌(承平7年), 右大将実頼屏風歌(天慶2年4月), 右衛門督源清蔭屏風歌(天慶2年閏7月), 宰相中將敦忠屏風歌(天慶2年), 右大将実頼屏風歌(天慶4年1月), 内裏屏風歌(天慶4年3月), 内侍屏風歌(天慶5年4月), 内裏屏風歌(天慶5年9月), 亭子院屏風歌(天慶5年), 内裏屏風歌(天慶8年2月)

その他⁽²³⁾

曲水宴作歌(昌泰元年前後), 宇多法皇大堰川御幸供奉歌(延喜7年9月), 僧戒撰の死弔歌(延喜7年以後), 尚子満子奉賀歌(延喜12年12月), 定方奉賀歌(延喜12年), 宣旨により作歌(延喜17年8月), 兼輔諒闇の間に母を失い弔歌を送る(延長8年), 章明親王元服の日作歌(延長8年), 実頼男女子元服裳着歌(承平5年12月), 忠平に供して白河殿にて作歌(承平5年), 師輔室勤子内親王の四条宮に詣ず(承平5年), 大宰帥橘公頼送別歌代作(承平5年), 石清水臨時祭奉納歌(天慶5年4月), 大納言師輔の魚袋返却歌代作(天慶6年1月) なお, 貫之の著作として、『古今枕草』『口耳伝』『無見頂相記』『歌まくら』『風土記』といった書名が, 中世の文献に伝えられているが, いずれも仮託の偽書と見なされて問題とするに足らない⁽²⁴⁾。

以上あげた, 歌人貫之の業績は, 当代の歌壇の第一人者たる貫禄を示すもの

で、まことに華な、常に脚光をあびた活躍をほしいままにしていたことがうかがわれる。

4. 『土佐日記』の紀行文学的性格

さて、再び『土佐日記』にかえて、考察をすすめていくことにする。

まず、『土佐日記』が貫之晩年の作品であることである。貫之が土佐守に任ぜられたのは延長8年(930)59歳の正月、それより、後任の島田公鑿が補せられたのが貫之63歳の承平4年(934)4月29日、足掛け5年の国守の任を終えて、同年12月21日に土佐を出発、翌5年2月16日帰洛した。『土佐日記』はこの路次のことを書き綴ったものであって、できあがったのは承平5年(935)中と推定されている⁽²⁵⁾。

貫之は『新撰和歌』撰修の仕事に土佐在任中に果たし、献進に達するところとはならなかったが、これは勅命をうけての業であり、しかも、古今集撰進の時と異り、貫之独りの作業であって、念を入れ緊張した気持ちでたずさわったことは、その序にもうかがわれる。

帰洛後、同年9月には清和七親王(貞辰親王)御息所六十賀屏風歌、12月内裏屏風歌などを初めとして、貫之の歌作詠進は活発となってくる。

この間に貫之が『土佐日記』の筆を執ったとすると、この『土佐日記』のみは、他の撰修、歌作と異って、多分に私的な、恣意的で、対象のない発表意図の不明確な作品として生まれたのである。

すなわち、貫之としては、日記の冒頭にあるように、「そのよし(旅行中の様子)を、いささかに、ものにかきつく」という程度だったのである。

それに、都より土佐への赴任の途次、往路の記でなく、任果てて帰京のための帰路の記であることも、貫之自身としては、気持ちの上でこのようなものをこす自然なものがあったのではなかろうか。

土佐在任中といえども、懐京の念にかられることのあるのは人情の然らしむ

るところであろうが、いよいよ国府を去って、船路をたどるに及んで、かえって懐京の情いやまさるも当然のことであろう。

まず、元日の条に、「けふはみやこのみぞおもひやらるる」と京の元日のしめなわなどの祝いものをなつかしがつているし、7日には「あをむま」を思うてかいなきことを嘆いている。同じく11日には、「はね」という地名にちなんで「まことにてなにきくところはねならばとぶがごとくにみやこへもがな」の歌があり、また29日に「京のねのひのこといひいでて『こまつもがな』といへど、うみなかなれば、かたしかし」とある。2月5日になると、次第に「京のちかづくよろこび」を記し、翌6日は「ふなゑひのあはじのしまのおほいご、みやこちかくなりぬといふをよろこびて、ふなぞこよりかしらをもたげて」詠める歌「いつしかといぶせかりつるなにはがたあしこぎそけてみふねきにけり」があり、長い船路の船酔いに苦しんでいたものの京に近づく喜びに元気づく様も見られる。9日には「みやこのちかづくをよろこびつつのぼる」と、その喜びもつる。

一方、貫之は土佐の国を去って遠ざかるとともに、12月27日の条にある「京にてうまれたりしをんなご、くにてにはかにうせ」た追憶が彼と彼の妻を悲しませる。

この12月27日を初めとして、1月11日に「またむかしへびとをおもひいでて、いづれのときにかわする」と、「よのなかにおもひやれどもこをこふるおもひにまさるおもひなきかな」の歌がある。2月4日は和泉の沿岸に泊まり、「このとまりのはまには、くさぐさのうるわしきかひ、いしなどおほかり。かかれば、ただむかしのひとをのみこひつつ」詠んだ「よするなみうちもよせなむわがこふるひとわすれがひおりてひろはん」また「わすれがひひろひしもせじらたまをこふるをだにもかたみとおもはん」の2首をのこし、「をんなごのためには、おやをさなくなりぬべし」と、思ひのたけをはばからず述べている。翌5日住吉の辺りで「ここにむかしへびとののはは、ひとひかたときもわすれね

紀行文学として見た『土佐日記』

ばよめる」と、「すみのえにふねさしよせよわすれぐさしるしありやとつみてゆくべく」の1首があり、「うつたへにわすれなんとにはあらで、こひしきこちしばしやすめて、まともこふるちからにせんとなるべし」とあきらめてもあきらめきれぬ思ひである。

9日には、都に近くなり、「京よりくだりしときに、みなひと、子どもなかりき。いたれりしくにてぞ、子うめるものどもありあへる。ひとみな、ふねのとまるところに、こをいだきつつおりのりす」と、ひとの子を見るにつけ、「なかりしもありつつかへるひとのこをありしもなくしてくるがかなしき」と歌い、「かうやうのこともうたも、このむとてあるにもあらざるべし。もろこしもここも、おもふことにたへぬときのわざとか」と、心中切々と思ふいたみにたえかねての歌としている。

そして、最後に、16日ようやくわが家について、「おもひいでぬことなく、おもひこひしきがうちに、このいへにてうまれしをんなごのもろともにかへらねば、いかはがかなしき。」と、「むまれしもかへらぬものをわがやどにこまつのあるをみるがかなしき」「みしひとのまつのちとせにみましかばとほくかなしきわかれせましや」の2首を詠み、「わすれがたく、くちをしきことおほかれど、えつくさず」と尽きぬ亡児への思いを述べて『土佐日記』は終わっている。

これらの懐京の思いにしても、亡児追慕にしても、個人的な私事にわたることであるが、また公的な、当時の社会事情として、海賊の怖れのことしばしば出てくる。

藤原純友の海賊の乱は、貫之離任後間もなく承平6年(936)ごろより、山陽南海の地で活躍ははじめ、やがて瀬戸内海の手海賊として、朝廷をおびやかすにいたるものである。

貫之在任中にも、『日本紀略』『扶桑略記』等の記事など、承平2年(932)中に海賊の事を伝えるものが多く、海賊の怖れが高まりつつあった。

しかし、貫之在任中の延長8年(920)より承平4年(934)にいたる間は、南海の海賊も土佐の西隣南予がその根拠地であったので、土佐の沖合を通るぐらいで、土佐国を侵すということまでは幸なかつたらしい。

貫之から二番目の国司の代になると、天慶3年(940)12月侵寇の事が報ぜられている⁽²⁶⁾。

したがって『土佐日記』の海路の旅にも、海賊の恐怖が記されて、1月21日「くによりはじめて、かいぞくむくいせん」、23日「かいぞくのおそりありといへば、かみほとけをいのる」、25日「かいぞくおひくといふこと、たえずきこゆ」、26日「かいぞくおふといへば、よなかばかりよりふねをいだしてこぎくるみちに、たむけするところあり」、30日「かいぞくはよるあるきせざなりとききて、よなかばかりにふねをいだし」て、ついに「いまはいつみのくににきぬれば、かいぞくものならず」とようやく海賊の難から解放される。

ここに、懐京の情と、忘兎追慕と、海賊の恐怖との3点を特別にとりあげたのは、帰路の海上紀行を支える、重要なポイントをなすからである。

さきに幾多の虚構のことにふれたが、この3つに関する限り、虚構が加えられたとしても、日時、場所の配置転換程度であって、もちろんそれが全体の結構の布石となるものでも、これらの3つは貫之にとって、事実であり、真実であり、帰路の紀行に点在して、『土佐日記』の紀行の実を伝えるものとなっている。

しかも、出発にあだつての人人との送別離別、1月9日「くにのさかひのうちとはとて、みおくりにくるひとあまた(中略)、ここかしこにおひくる。このひとびとぞこころざしあるひとなりける」とあるように、国境に達するまでも、泊り泊りで人々の来訪をうけて送別の情を尽くしている。また帰着の状況も、わが家の有様「いへにいたりて、かどにいるに、つきあかければ、いとよくありさまみゆ。ききしよりもまして、いふかひなくそこほれやぶれたる。いへにあづけたりつるひとのこころも、あれたるなりけり。(中略)さて、いけめで

紀行文学として見た『土佐日記』

くぼまり、みづつけるところあり。ほとりにまつもありき。いつとせむとせのうち、千とせやすぎにけん、かたへはなくなりけり。いまおひたるぞまじれる。おほかたのみなあれにたれば、『あはれ。』とぞひとびといふ。」と、しばらく見ぬ間にあれ果て、留守居にたのんだ人々の不実を憤る気持ちとともに、その実感をつたえている。

発端と結末然り、その間の船路の旅中の有様もさきの記事要約表をたどれば、日時、地名等に虚構の手が加えられていても、全般の紀行性は、『土佐日記』の結構の基盤となつてゆるがぬところである。

しかも、地方から都への船旅となると、今日想像できる以上に容易ならぬものがあつた。1月3日「おなじところなり。もしかぜなみの、『しばし』とをしむころやあらん、ころもとなし」、翌4日「かぜふけば、えいでたはず」、つづいて5日「かぜなみやまねば、なほおなじところにあり」、14日「あかつきよりあめふれば、おなじところにとまれり」、16日「かぜなみやまねば、なほおなじところにとまれり」、18日「なおおなじところにあり。うみあらければ、ふねいださず」、20日「きのふのやうなれば、ふねいださず。みなひとびとうれへなげく」、25日「かちとりらの、『きたかぜあし』といへば、ふねいださず」、27日「かぜふき、なみあらければ、ふねいださず」、28日「よもすがらあめやまず。けさも」、2月1日「あしたのま、あめふる。むまときばかりにやみぬれば、いつみのなだといふところよりいでてこぎゆく」、2日「あめかぜやまず、ひとひと、よもすがら、かみほとけをいのる」、3日「うみのうへきのふのやうなれば、ふねいださず。かぜのふくことやまねば、きしのなみたちかへる」、4日「かちとり、『けふ、かぜくものけしきはなはだあし。』といひて、ふねいださずなりぬ」、5日「けふ、からくして、いつみのなだよりをづのとまりをおふ」、のち「ゆくりなくかぜふきて、こげどもこげども、しりへしぞぎにしぞぎて、ほとほとしくうちはめつべし」など、雨風にさえぎられ、晴れ間を見ては船出したのである。

紀行文学として見た『土佐日記』

その上、1月8日「さはることありて、なほおなじところなり」、15日「くちをしく、なほひのあしければ、(略)」、19日「ひあしければ、ふねいださず」、2月10日「さはることありて、のほらず」と障りの日を忌んで、旅の難をさけ、出立を延ばすことが行なわれた。それらが、その都度このように書き留められて、紀行の真実性をさらに加えている。

ただ、紀行の特色の一つである風景描写が乏しい難がある。わずかに1月9日「かくて、宇多のまつばらをゆきすぐ。そのまつのかずいくそばく、いくちとせへたりとしらず。もごとになみうちよせ、えだごとにつるぞ」とびかよふ」がある程度で、2月1日「くろさきのまつばらをへてゆく。ところのなはくろく、まつのいろはあをく、いそのなみはゆきのごとくに、かひのいろはすはうに、五色にいまひといろぞたらぬ。」となると、風景描写というよりは、五色にかけた文章表現の面白さが目立つ。

それは、おそらくは帰路の旅のことでもあり、貫之の目は往路に見た風物に再び目をとめることがなかったのかもしれない。

それよりも、船中の出来事や、所懐を記すること多く、歌人貫之としてはおのずから歌作りや歌の話が主たる記事となることも当然のことである。

しかも、貫之が帰洛後、くつろいだ気持ちで、自由に筆を執った『土佐日記』に、気の向くまま諷刺諧謔に筆がはしり、洒落や粹語がほとぼりして、香川景樹も『土佐日記創見』で、「されば此書の大むね、亡児の悲みを主とし、下に海賊の恐りをふみ、是をかすむるに、全文俳諧をもてす」といい、『土佐日記』を俳諧の文学と論ずる説もお行なわれている⁽²⁷⁾。

女性仮託から出発している『土佐日記』そのものがすでに俳諧であり、諧謔であり、そこに漢語漢文によって貫之の男性がちらつくことも一層の面白味を添えていることになる。

諷刺諧謔的記事内容としては、

(1) 国司の離任に際して、土地の人々は、世間の眼を憚かって見送りに来な

いという民情を指摘したもの（12月23日）

- (2) そしてむしろ、国府を離れてから、遠くまで後を逐って別れを惜しむ風習のあることを指摘したもの（12月27日、28日、1月4日、9日）
- (3) 京都近辺の住民は、国司下向の際よりも帰京の際に、とやかくと歓迎の意を表して土産ものを期待する風習のあることを指摘したもの（2月15日、16日）
- (4) 貫之は、極めて貧寒、節約で、余計な金銭財物を一切所有しない廉直の国司であったという事実を主張したもの（12月23日、1月2日、4日、14日、2月8日）
- (5) 新任の国司の赴任が遅れた結果、正月七日の叙位に洩れたことを遺憾とし、島田公鑒に対する不満を直接間接に表明したもの（12月24日、25日、26日、27日、1月7日）
- (6) 楫取りの物欲主義と、楫取りに利用される神威の不合理を指摘したもの（12月27日、1月9日、14日、21日、26日、2月4日、5日）
- (7) 医師に対して好意的ならざる態度を表明したもの（12月29日、1月元日）²⁸⁾
- (8) 世相人情の軽薄を憤ったもの（2月16日）

などがあげられる²⁸⁾が、いずれも貫之自身が感じたところを率直に、だれ憚らず述べたのがおのづから諷刺の針ともなっているのである。

なお、歌論的なことにふれて諧謔を弄する場合（1月7日、29日、2月1日、6日）も同じように、貫之のくつろいだ気持ちから率直に出たものであろう。

1月元日の「ただおしあゆのくちをのみぞすふ。このすふひとびとのくちを、おしあゆもしおもふやうあらんや」という口吸いのことや、同13日の子どもの水浴の様を記して、「なにのあしかげにことづけて、ほやのつまのいずし、すしあはびをぞ、こころにもあらぬはぎにあげてみせける」というきわどい描写に、エロチックな面白味をはばかりどころもなく加えている。

とくに、筆の赴くままにとばす洒落や地口の類は、駄洒落に墮して、貫之の

ものとしていただけないものもある。

12月22日「ふなちなれど、むまのはなむけす」、同日「かみなかしも、ゑひあきて、いとあやしく、しほうみのほりにてあざれあへり」、同24日「一文字をだにしらぬものしが、あしは十文字にふみてぞあそぶ」、同27日「かのひとびとの、くちあみももろもちにて、このうみべにてになひいだせるうた」、同日「あるひと、にしぐになれど、かひうたなどいふ」、1月7日「かかるあひだに、ひとのいへの、いけとなあるところより、こひはなくて、ふなよりはじめて、かはのうみのも、こともども、ながひつになひつづけておこせたり」、同9日「これらをひとのわらふをききて、うみはあるれども、こころはすこしなぎぬ」などの例を見れば、まことに単純で説明的、即興的なそれにすぎない。

表現技巧や構成布置の上では、好きなように工夫をこらすところがあったとしても、貫之にとって、冒頭の「そのよし、いささかにものかきつく」であり、末尾の「わすれがたく、くちをしきことおほかれど、えつくさず。とまれかうまれ、とくやりてん。」ものであった。これを文字通りにうけとれば、ひろく世に問うて、後世までのこそうという意図の作品ではなかったといえよう。

思うままに、自分の気持ちと趣向を率直に書きつづった作品だけに、日記の形をとり、紀行でありながら、紀行の枠から逸脱するほど見聞、風懐から、歌論や諷刺など盛り沢山にもりこんで、そのために紀行文学としての性格が拡散されてしまったものである。

かえって、そこが『土佐日記』の魅力として、歌聖貫之の作としてのみならず、もてはやされた所以でもあろう。

しかし、これも一つの紀行文学の相を示すものと考えたい。

注

- (1) 鈴木知太郎『平安時代文学論叢』付 三「奥の細道」と「土佐日記」と
- (2) 日本古典文学大系20『土佐日記外』解説（鈴木知太郎担当）一名称・作者の項に

紀行文学として見た『土佐日記』

よる

- (3) 同上、二成立の項による
- (4) 同上、四文学史的位置および意義の項による
- (5) 萩谷朴『土佐日記全注釈』（日本古典評釈・全注釈叢書）解説，作品について、二土佐日記の素材と形態の項による
- (6) 鈴木知太郎『平安時代文学論叢』第三部日記文学“三土佐日記の構成”六叙述の繁簡を対照的に扱ったものの中所載の“土佐日記における日日の文字数（日附を含む）”を借用し、それに記事を要約して添えた。
- (7) 池田勉“土佐日記ははたして貫之の作か”（成城文芸第6号，昭和31年1月）
- (8) 上田秋成『土佐日記解』序文「この記も（中略），かなし子の事くゆるハ，男たましひもなきそと人の思はんを，やさしみて女のかけるさまにうつしなされたるなりける」
- (9) 萩谷朴『土佐日記全注釈』解説，作品について，四土佐日記の構想と手法 (イ)戯曲構成の項による
- (10) 同上，解説，作品について，六土佐日記の意識と効果 (イ)童心誘掖の項による
- (11) 同上，注釈篇，39一月卅日[評]脚色虚構・一貫照応の項による
- (12) 同上，解説，作品について，五土佐日記の表現と文体 (イ)対句押韻の項による
- (13) 同上 (イ)訓読表現の項による
- (14) 同上，解説，作品について，三土佐日記の主題 (イ)歌論展開の項による
- (15) 同上，解説，作品について，六土佐日記の意識と効果 (イ)童心誘掖の項による
- (16) 目崎徳衛『紀貫之』（人物叢書）一貫之を形成したもの，1出生をめぐっての項による
- (17) 萩谷朴『土佐日記全釈』解説，作者について，一貫之の家系と人間形成の項による
- (18) 同上，二貫之の生涯と業績の項による
- (19) 目崎徳衛『紀貫之』巻末，略年譜による
- (20) 萩谷朴『土佐日記』（日本古典全書）解説，九貫之の他の作品，新撰和歌と序文の項による。
- (21) 目崎徳衛『紀貫之』三貫之の老年，3死とその後の項による
- (22) 萩谷朴『土佐日記』解説，九貫之の他の作品，自撰本貫之集，他撰本貫之集の項による
- (23) 歌合，屏風歌，その他については，目崎徳衛『紀貫之』巻末略年譜による
- (24) 同上，三貫之の老年，3死とその後の項による
- (25) 萩谷朴『土佐日記全注釈』解説，作品について，一土佐日記の成立の項による
- (26) 同上，作者について，二貫之の生涯と業績の項による

紀行文学として見た『土佐日記』

- ㉗ 小西甚一『土佐日記評解』（昭和26年12月），中田祝夫『土佐日記』新注国文学叢書（昭和26年12月）参照
- ㉘ 萩谷朴『土佐日記全注釈』解説，作品について，三土佐日記の主題，(㊦)社会諷刺の項による